

# 第2章 接続期の教育について

保育者と小学校の教師が、幼児期の教育と小学校教育の相違点や共通点を知り、お互いの教育について理解を図るために、この章では両者の相違点や共通点について述べていきます。

## 1 環境を通して行う幼児期の教育 幼児教育の基本

幼稚園教育要領では、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、(中略) 幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行う」こととし、保育者に「幼児との信頼関係を十分に築き、幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努める」ことを求めています。

同様の記載は、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領にもあります。

### 環境に主体的に関わることで育つ幼児期の資質・能力

子どもは、身近なあらゆる環境からの刺激を受け止め、自ら興味をもって環境に主体的に関わりながら、様々な活動を展開していきます。

例えば、夏の暑い日、水道の蛇口にホースが取り付けられていたら、水を出し、手や足や時には顔にかけ、その感触や状態に興味をもつことでしょう。やがて、近くに砂場やスコップがあることに気付けば、砂場に穴や溝を掘って、そこに水を流し入れ、水がたまっていくことを楽しんだり、水と砂を混ぜて団子を作ったりと、遊びを発展させていきます。友達と協力して大きな穴やたくさんの団子を作ることが楽しいと気付けば、一緒に活動するようになります。このように、夢中で遊んだ結果、子どもは、満足感を



たっぷり味わいます。また、遊ぶ過程では、時に、友達と道具の取り合いや掘り方の

順番などを巡ってトラブルが起きることもあるでしょう。さらに、水と砂の配合がうまくいかず、団子が崩れてしまうこともあるでしょう。

しかし、子どもは、自分の気持ちに折り合いをつけたり、何度も試行錯誤をしたりしながら、納得いくまで遊び続けます。そして、遊び終わった後の満足感から、「できた」「楽しかった」という自信をつけ、「もっとやりたい」「また友達と一緒に遊びたい」「次はこうしてみたい」など、次の活動意欲へつなげます。

このような経験を積み重ねることで、好奇心や探究心などの学習意欲、協調性や寛容な心、粘り強さや努力などが育まれていきます。子どもは、自ら活動を生み出し、試行錯誤しながら活動を発展させていくことで、幼児期にふさわしい資質・能力を獲得していくのです。

## 保育者の役割

保育者の役割は、子ども一人一人が、活動を生み出し、それを発展させていけるように意図的に環境を構成していくことです。ここでいう環境とは、物的な環境だけでなく保育者や友達との関わりを含めた状況全てを指します。つまり、保育者が意図的に環境を構成するとは、「長いホースがほしい」「スコップやシャベルがほしい」など、遊んでいく中で出てくる子どもの要求や欲求に対応できる準備をしておいたり、失敗しても粘り強く取り組めるよう励ましたり、時にはモデルとなって一緒に作ってみたりすることです。子どもが納得いくまで遊び込むことを全力で援助し、子どもに「できた」「楽しかった」「次も遊びたい」という実感を積み重ねさせたいものです。

そのために、保育者は、日々、他の保育者や支援員と積極的に情報交換を行い、子どもの生活する姿を捉え、何に関心があるのか、何に意欲的に取り組んでいるのか、あるいは取り組もうとしているのか、何につまずいているのか、子ども一人一人を丁寧に見取っていくことが大切です。

同様に、子どもの活動にどのような価値があるのかを見取る力も重要です。子どもの遊びの中には、小学校以降の学習の土台となる学びがたくさんあります。

例えば、ペットボトルから流れ出る水を手で受け止めている1歳児の遊びの中に、どんな学びがあるのでしょうか。「流れる水の感触」「温かい、冷たいなどの感覚」「だんだん量が減っていき軽くなっていく感覚」など、液体や質量の性質の理解につながる学びが見られます。

例えば、牛乳パックで作ったケーキを箱に片づけている4歳児の活動の中に、どんな学びがあるのでしょうか。長さをそろえて同じ向きで立体を重ねていることから、等しい長さ



や合同な形を認識していることが分かります。

これらの学びは、子どもにとって遊びの中で感覚的に獲得しているもので、学習しているという実感はありません。いわば、「無自覚な学び」です。しかし、このような感覚をたくさん経験することは、小学校以降の学習において、実感を伴って理解することを促進したり、課題解決の糸口をつかむための先行経験となったりします。「遊びは学び」とよく言われますが、保育者が、「向きをそろえたらきれいに入ったね」「すごい、そんなこともできたんだ」などと価値付けることで、子どもは自信をもって自分の遊びを展開していくようになります。そのためにも、子どもの遊びの中にどのような学びがあるのか見取る力をつけることは大切なのです。



さらに、見取りの力を高めるためには、複数の保育者で、同じ子どもの様子を協議することが効果的です。協議を通して、子どもの遊びを多面的に理解することができます。特に、小学校以降の学習の土台となる学びを見取るためには、小学校の教師と子どもの姿について語り合うと、新たな視点による捉え方ができ、自分の見方や考え方に広がりや深みが出てくるでしょう。

## 2 確かな学力を育む小学校教育 教科等の学習を通して育む資質・能力

小学校教育では、幼児期に総合的に育まれた資質・能力を踏まえ、それを徐々に各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせた学びにつなげ「確かな学力」を育成していきます。今回の学習指導要領等の改訂で「確かな学力」は、これからの社会を切り拓くために必要な資質・能力として、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱に整理されました。

学習指導要領には、各教科等において年間で実施する標準時数や1単位時間が示されています。小学校第1学年の標準年間総時数は850時間で、1単位時間は45分です。各教科等においては、それぞれ達成すべき目標と学習内容が定められており、教科書等を使って学習を進めていきます。

### 幼児期の教育との相違点・共通点

幼児教育と小学校とでは、上記した教育課程の他に指導方法が異なっています。幼児教育では、環境を通じた自発的な活動を重視して展開するのに対し、小学校教育では、時間割に沿って教科ごとのねらいに即した学習活動となります。この相違は、生活の流れと学習活動の相違として顕在化します。幼児教育では、一日の流れや週の流れの中で子どもの活動を見取り展開するのに対し、小学校では、学習材に対する教師の解釈や各授業時間のねらいによって活動が展開されます。

一方、幼児教育と小学校とで共通する点もあります。静岡県教育委員会発行の教師用指導資料「よりよい自分をつくっていくために\*4」では、どの子どもにも確かな学力を育むためには、子ども自らが「学びの実感」を積み重ねていくことが大切であると述べています。「学びの実感」とは、「なぜだろう」「こうしたらどうだろう」「できそうだ」「分かってきた」「納得した」「自分の言葉で説明できそうだ」「もっとやってみたい」といった学習過程で子ども自らの心に湧き上がってくる手応えです。そして、それは、人との関わり合いを通して高まっていきます。そのために、教師は、教材研究と子ども理解に基づき、「学びの見通しをもち、意図的に働き掛けること」、「子ども一人一人を丁寧に見取り指導に生かすこと」を繰り返し行うことが大切です。

子ども一人一人を丁寧に見取り、意図的に働き掛けることは、保育者にも小学校の教師にも共通している指導のプロセスです。

#### \*4 「よりよい自分をつくっていくために」

主に小中学校の教員を対象に、静岡県教育委員会が作成した教師用指導資料。授業づくりで大切にしたいこと等を示すとともに各教科等の実践事例を紹介している。現在、静岡県教育委員会のホームページから、「よりよい自分をつくっていくためにⅢ（H25.3 発行）」「よりよい自分をつくっていくためにⅣ（H27.4 発行）」「資料編Ⅰ（H28.3 発行）」「資料編Ⅱ（H29.3 発行）」をダウンロードすることができる。



## 主体的・対話的で深い学びの実現

学習指導要領では、これからの社会を切り拓いていくために必要な資質・能力を育成する在り方として、「主体的・対話的で深い学び」が実現するように授業等を工夫・改善することを求めています。同様に、幼稚園教育要領、保育所保育指針等でも、「主体的・対話的で深い学び」の視点で指導の改善を図ることを求めています。



前述した「よりよい自分をつくっていくために」では、「学びの実感を積み重ねることによって、子どもの主体的な学びの姿勢を育み、学びの質的な向上を目指す」と述べており、「主体的・対話的で深い学びの実現」と通じる考えであると捉えることができます。

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続のためには、お互いの教育について理解し、幼児期に育まれたことを踏まえて小学校における学習活動が展開していくことが求められますが、それは、幼小双方で、「学びの実感を積み重ねる」つまり「主体的・対話的で深い学び」が実現するように保育や授業を工夫・改善していくことだと言えます。

### 3 自己肯定感を高める接続期の教育 小学校教育につながる教育・保育

5歳児後半になると、子どもは、身近な社会や自然に、これまで以上に好奇心や探究心をもって関わり、気付いたこと考えたことを言葉などで表現し、会話を通してさらに興味や関心を高めていきます。また、社会性が発達し、友達と関わりながら集団で活動することや、家族や地域の人と触れ合うことに喜びや楽しさをより感じるようになります。

保育者は、卒園が間近に迫っていることを実感し、小学校への円滑な接続を目指して、小学校教育につながる力をつけることを一層意識します。小学校教育につながる力をつけるとは、小学校生活を先取り、小学校に対する適応指導を行うことではなく、子どもがこの時期の発達に即した遊びや生活を充実させたり、発展させたりできるように援助することです。

この時期の子どもは、自然の美しさや不思議さ、物の仕組みのおもしろさに気付いたり、文字や標識、数や形への関心や探究心が高まったりするなどの特徴がみられます。また、遊びを楽しむために自分たちで決まりを作ったり、役割を決めて発展させたりするように、目的に向かって協力することで、仲間の中の一人としての自覚が生まれます。

このような仲間と協力する遊びは、子どもにとって少し複雑で、負荷のかかる場合もあるので、うまくいかないこともあるでしょう。しかし、何度も試行錯誤をする中で、仲間の役に立つ



ことを嬉しく感じて充実感や達成感を得ることができます。このような経験の積み重ねが子どもの自己肯定感を高め、次の活動に向かう意欲を促進し、小学校生活への期待を膨らませていきます。

#### 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点にした教育・保育

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、到達目標ではなく、子どもの成長の方向性を示したものであり、これまで育ってきた姿、これから育っていく姿と捉えることができます。そして、これらは個別に取り出されて指導されるものではなく、一人一人の発達の特性に応じて育ってくる姿です。したがって、全ての子どもに同じように見られるものではないことに留意する必要があります。文部科学省が新幼稚園教育要領説明会において提示した資料には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、「5歳児前半までに見られる育ちの姿」「5歳児後半になると見られる育ちの姿」「小学校以降の育ちの姿」が項目ごとに具体的に例示され、子どもの育ちの過

程がよく分かります。(表1)

保育者は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点として、子どもにどんな姿が育ってきているのかを記録し、小学校に伝えていくことが大切です。また、幼児期にふさわしい資質・能力を育むために、卒園までにどんな経験を積ませるとよいか、今後の指導計画を立てる際の視点として活用することも効果的です。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、5歳児後半に突然見られるようになるものではありません。保育者は、3歳、4歳の時期から、もっと言えば乳児期から、子どもが発達して



いく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい経験を積み重ねていけるよう援助していくことが大切です。

一方、小学校では、幼稚園・保育所・認定こども園等からの情報をもとに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を参考にして、目の前の子どもにどんな姿が育っているのか把握し、幼児期に育まれた資質・能力が、各教科等における学習に円滑に接続されるように、教育活動を工夫することが求められます。学習指導要領では、そのような教育活動の工夫の具体として、「生活科を中心に合科的・関連的な指導\*5や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと」と述べています。

#### \*5 合科的・関連的な指導

合科的な指導とは、単元又は1コマの時間の中で、複数の教科の目標や内容を組み合わせ、学習活動を展開するものである。

関連的な指導は、教科等別に指導するに当たって、各教科等の指導内容の関連を検討し、指導の時期や指導の方法等について相互の関連を考慮して指導するものである。

【表1】

## 幼児期から児童期に見られる子どもの育ちの姿

| 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿  | 5歳児前半までに見られる育ちの姿  | 5歳後半に見られる育ちの姿   | 小学校以降の育ちの姿  |
|--|---|---|---|
| <b>① 健康な心と体</b><br>幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に動かして、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。   | 体を動かす気持ちよさを感じたり、生活に必要な習慣や態度を身に付けたりしていく。   | 充実感をもって自分のやりたいことに向かって、繰り返し挑戦したり諸感覚を働かせ体を思い切り使って活動したりするなど、心と体を十分に動かして、遊びや生活に見通しをもって自立的に行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出す。   | 次の活動を考えて準備をするなどの見通しをもって行動したり、安全に気を付けて登下校しようとしたりする。<br>運動遊びにおいて自ら体を動かすことを楽しんだり、休み時間に友達と一緒に楽しくすごしたりするなど、様々な場面においてのびのびと行動する。 |
| <b>② 自立心</b><br>身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。   | 信頼する教師に支えられながら、物事を最後まで行う体験を重ね、自分の力でやろうとする気持ちをもったり、やり遂げた満足感を味わったりするようになる。  | 遊びや生活の中で様々なことに挑戦し、失敗も繰り返しの中で、自分でしなければならないことを自覚するようになる。教師や友達の力を借りたり励まされたりしながら、難しいことでも自分の力でやってみようとして、考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げる体験を通して達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。   | 自分でできることは自分でしようとする積極的に関わり。生活や学習での課題を自分のこととして受け止めて意欲的に取り組む。自分なりに考えて意見を言ったり、分からないことや難しいことは、先生や友達に聞きながら粘り強く取り組んだりする。         |
| <b>③ 協同性</b><br>友達と関わる中で、互いの思いや考えを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。  | 友達と関わる中で、様々な出来事を通して、嬉しい、悔しい、悲しい、楽しいなどの多様な感情体験を味わい、友達との関わりを深めていく。その中で互いの思いや考えなどを共有し、次第に共通の目的をもつようになる。  | 共通の目的の実現に向けて、考えたことを相手に分かるように伝えながら、工夫したり、協力したりし、充実感をもって幼児同士でやり遂げるようになる。  | 学級での集団生活の中で、目的に向かって自分の力を発揮しながら友達と協力し、様々な意見を交わす中で新しい考えを生み出しながら工夫して取り組むなど、教師や友達と協力して生活したり学び合ったりする。                          |
| <b>④ 道徳性・規範意識の芽生え</b><br>友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを整理し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。   | 他の幼児と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことがあることを分かり、考えながら行動するようになっていく。  | いざこざなどうまくいかないことを乗り越える体験を重ねることを通じて人間関係が深まり、友達や周囲の人の気持ちに触れて、相手の気持ちに共感したり、相手の視点から自分の行動を振り返ったりして、考えながら行動する姿が見られるようになる。また、友達と様々な体験を重ねることを通じて人間関係が深まる中で、決まりを守る必要性が分かり、友達と一緒に心地よく生活したり、より遊びを楽しんだりするために、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。 | 相手の気持ちを考えたり、自分の振る舞いを振り返ったりしながら、気持ちや行動を自立的に調整し、学校生活を楽しくしていこうとする。   |
| <b>⑤ 社会生活との関わり</b><br>家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気づき、相手の気持ちを考えたり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになる。また、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。 | 教師との信頼関係を基盤としながら園内の幼児や教職員、他の幼児の保護者などいろいろな人と親しみをもつて関わるようになる。その中で、家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、小学生や中学生、高齢者や働く人々など地域の身近な人と触れ合う体験を重ねていく。                        | 人との様々な関わり方に気づき、相手の気持ちを考えたり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。<br>好奇心や探究心が一層高まり、関心のあることについて、より詳しく知りたいと思ったり、より本物らしくしたいと考えて遊びの中で工夫したりする中で、身近にあるものから必要な情報を取り入れる姿が見られるようになる。   | 相手の状況や気持ちを考えながらいろいろな人と関わることを楽しんだり、関心のあることについての情報に気付いて積極的に取り入れたりする。また、地域の行事や様々な文化に触れることを楽しんで興味や関心を深め、地域への親しみや学びの場を広げていく。   |
| <b>⑥ 思考力の芽生え</b><br>身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気づき、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。   | 身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりするようになる。   | 遊びや生活の中で、物の性質や仕組みなどを生かして、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、身近な環境との多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気づき、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにしていく。  | 新しい環境や教科等の学習に興味や関心をもって主体的に関わる。また、探究心をもって考えたり試したりするなど主体的に問題を解決しようとする。  |
| <b>⑦ 自然との関わり・生命尊重</b><br>自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まる。また、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしての扱い、大切にすることを覚えるようになる。   | 園内外の身近な自然の美しさや不思議さに触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、関心をもつようになる。   | 好奇心や探究心をもって考えたことをその幼児なりの言葉などで素直に表現しながら、身近な事象への関心を高めていく。身近な自然や偶然出会った自然の変化に遊びに取り入れ、皆や教師と話題にして継続して関心をもって見たりするなどのことを通じて、新たな気づきが生まれ、更に関心が高まり、次第に自然への愛情や畏敬の念をもつようになっていく。  | 自然の事物や現象について関心を持ち、その理解を確かなものにしていく。さらに、生命あるものを大切に、生きることの素晴らしさの自覚を深める。  |
| <b>⑧ 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚</b><br>遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。   | 遊びや生活の中で、身近にある数字や文字に興味や関心をもったり、物を数えることを楽しんだりするなど、教師や友達と一緒に数量や図形、標識や文字等に触れ、親しむ体験を重ねていく。  | 自分たちの遊びや生活の中で必要感をもって、多い少ないを比べるために物を数えたり、長さや広さなどの量を比べたり、様々な形を組み合わせて遊んだりすることを通して、数量や図形への興味や関心を深め、感覚が磨かれていく。また、遊びや生活の中で関係の深い標識や文字等に関心をもちながらその役割に気付いたり使ってみたりすることで、文字や標識への興味や関心を深め、感覚が磨かれていく。  | 学習に関心をもって取り組み、実感を伴って理解するとともに、学んだことを日常生活の中で活用しようとする。   |
| <b>⑨ 言葉による伝え合い</b><br>先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。  | 教師や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付けていく。また、自分の気持ちや思いを伝え、教師や友達が話を聞いてくれる中で、言葉のやり取りの楽しさを感じ、そのやり取りを通して相手の話を聞いて理解したり、共感したりして、言葉による伝え合いができるようになっていく。 | 伝える相手や状況に応じて、言葉の使い方や表現の仕方を変えるなど、経験したことや考えたことなどを相手に分かるように工夫しながら言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いて理解したりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。  | 友達と互いの思いや考えを伝え、受け止めて、認め合ったりしながら一緒に活動しようとする。また、自分の伝えたい目的や相手の状況などに応じて言葉を選んで伝えようとする。   |
| <b>⑩ 豊かな感性と表現</b><br>心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方に気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。  | 生活の中で心を動かす出来事に触れ、みずみずしい感性を基に、思いを巡らせ、様々な表現を楽しむようになる。また、それら表現が教師や他の幼児に受け止められることで、自分なりに表現することの喜びを味わう。  | 身近にある様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを必要なものを選んで自分で表現したり、友達と工夫して創造的な活動を繰り返したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりして、意欲をもつようになる。  | 感性を働かせ表現することを楽しむようになる。自分の気持ちや考えを一番適切に表現する方法を選ぶようになる。また、感することなく自信をもって表現することで、学校生活を意欲的に進めることができるようになる。                      |

幼保連携型認定こども園教育・保育要領 幼稚園教育要領 保育所保育指針 中央説明会資料(平成29年7月)より作成



## 幼児期の学びを踏まえた教育

小学校入学に際して、子どもは期待と同時に不安を抱いています。子どもが安心して学校生活を送ることができるように、入学当初は、幼児期に親しんだ活動を取り入れたり、分かりやすく学びやすい教室環境を整えたりすることが大切です。また、教師や友達と関わる活動を繰り返し設定し、担任との信頼関係や新しい仲間との人間関係を築くことも子どもの安心感につながります。まずは、子どもが「学校が楽しい」「明日も学校へ行きたい」「先生や友達と仲良くなれた」などの思いをもつことができるようにしましょう。

子どもが、安心感を抱くとともに、「自分でできた」「みんなの役に立った」などの自己肯定感や自己有用感を積み重ね、成長を実感できるようにすることも大切です。子どもには幼児期に遊びを通して、試したり、工夫したり、友達と協力したり、自分の考えを伝え合ったりするなど、たくさんの遊びを経験し、自立心や協同性、粘り強く取り組む姿勢などが育まれてきています。そのような幼児期に育まれた資質・能力を生かす活動や環境を意図的に設定しましょう。

例えば、身支度や給食の配膳、清掃等は、掲示物等を工夫し、教師の指示ではなく、掲示物を見て行動できるようにすると、「自分でできた」という自己肯定感を高めることができます。最上級生である6年生が生活や学習の支援をしてくれる場合がありますが、その際も、やり方のモデルを示したり、励ましの声掛けをしたり、できたことを褒めたりという役割を担わせるとよいでしょう。

当番活動や係活動に取り組ませる際は、子ども同士で考え、責任をもって取り組む姿勢や意欲を大切にしましょう。そうすることで、「みんなの役に立った」という自己有用感を一層高めることができます。

子どもは、小学校に入学したら学習が始まると期待しています。幼児期は、遊びの中で無自覚にいろいろな学びを経験してきましたが、今度は、子ども自身に学ぶという意識があります。「自分でも分かった」「自分でできた」という子どもの実感が次への学習意欲につながります。教師は、授業の中に、子ども一人一人が自分で考えたり作業したりする場や、友達と関わってよりよい考えを生み出していく場を設定していくことが大切です。



小学校の中には、非常に多くの園から入学してくる場合があります、既習経験や一人一人の育ちは当然異なります。お互いに教え合ったり学び合ったりすることで自己肯定感を高めるよい機会であるという発想で、学びを構成していきたいものです。

## 三つの自立に向けて

自分の成長を実感できるような活動を繰り返す中で、子どもは、自分で考え、判断し、行動するようになり、自立に向けて歩んでいきます。

文部科学省から平成22年11月に出了された報告書「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について\*6」では、幼児期（特に幼児期の終わり）から児童期（低学年）にかけての教育においては、「生活上の自立」「学びの自立」「精神的な自立」の三つの自立を養うことが必要と述べています。

小学校生活科は創設以来、この三つの自立への基礎を養うことを目指してきました。学習指導要領においてもその理念は受け継がれています。生活科の目標\*7は「自立し生活を豊かにしていくための資質・能力の育成を目指す」と示されていますが、この資質・能力は三つの自立に通じるものです。

子どもにとって、自己肯定感を積み重ねることは、どの発達段階においても学びに向かう原動力となる重要な要素ですが、三つの自立を目指す接続期においては、特に意識したいものです。

### \*6 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（H22.11 報告）

平成22年11月に文部科学省から出された報告書。幼小接続の現状と課題、幼小接続における教育課程編成・指導計画作成上の留意点等が示されている。文部科学省のホームページよりダウンロードが可能。この報告書の中で、示されている三つの自立とは、

#### 【生活上の自立】

生活上必要な習慣や技能を身に付けて、身近な人々、社会及び自然と適切にかかわり、自らよりよい生活を創り出していくこと。

#### 【学びの自立】

自分にとって興味・関心があり、価値があると感じられる活動を自ら進んで行うとともに、人の話などをよく聞いて、それを参考にして自分の考えを深め、自分の思いや考えなどを適切な方法で表現すること。

#### 【精神的な自立】

自分のよさや可能性に気づき、意欲や自信をもつことによって、現在及び将来における自分自身の在り方に夢や希望をもち、前向きに生活していくこと。

### \*7 小学校生活科の目標（H29.3 告示 学習指導要領より）

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

#### 【知識及び技能の基礎】

活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。

#### 【思考力、判断力、表現力等の基礎】

身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。

#### 【学びに向かう力、人間性等】

身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

## 4 切れ目のない支援体制の構築

### 組織的な対応

障害のある幼児などへの指導にあたっては、障害の種類や程度を的確に把握した上で、障害のある幼児などの「困難さ」に対する「指導上の工夫の意図」を理解し、個に応じた様々な「手立て」を検討し、指導にあたる必要があります。特別支援教育コーディネーターを中心にして、全教職員で個々の幼児に対する配慮等の必要性を共通理解するとともに、組織的な対応ができるようにしていくことが重要です。

### 小学校との連携

障害のある幼児など、一人一人に対するきめ細やかな指導や支援を組織的・継続的かつ計画的に行うためには、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、活用に努めることが求められます。これらの計画の活用にあたっては、就学先である小学校に在園中の支援の目的や教育的支援の内容を伝えるなどして、切れ目のない支援に生かすことが大切です。その際、個別の教育支援計画には、多くの関係者が関与することから、保護者の同意を事前に得るなど個人情報の適切な取扱いと保護に十分留意する必要があります。

また、保育者と小学校の教師との意見交換や合同の研修会、保育参観、授業参観等の機会を設けるなど、幼稚園等と小学校が組織的・継続的に情報交換していくことや、障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習の機会をつくり、相互のねらいや方法などを踏まえ、連携を図っていくことが大切です。

### 入学前後の支援体制

小学校においては、障害のある幼児などを正しく理解するための情報を得るとともに、入学前から4月当初の支援計画を作成し、受け入れの準備を進めることが大切です。校内で情報を共有し、入学式やその後の生活、学習に関する配慮点を確認しておきましょう。

入学後は校内委員会等を開催し、4月当初の対応や手だてについて話し合い、支援の在り方を検討していくことが必要です。その際、児童に関わっている関係機関とも連携し、必要な情報や教育資源を効果的に活用することが大切です。

保護者に対しては、入学してからの児童の様子を伝えたり、困り感に寄り添いながら助言したりすることで、相談・協力体制を整えていきましょう。また、特別支援コーディネーターや養護教諭、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等の協力を得て、児童が小学校生活にスムーズに適應できるよう学校全体で支援する体制をつくっていくことが重要です。